



「断片」をもちいる神

西堀元

(西部中会 北神戸キリスト伝道所宣教教師)
本学非常勤講師

昨年春から神学校チャペルで礼拝する北神戸キリスト伝道所での働きを始めました。同時に、非常勤講師として3年生の「救済論」という科目を担当させていただいています。

振り返ると神学生だった時、神学が本当に大切だと思った出来事がありました。2年目、初めての夏期伝道のときのことです。小さな自家用車一杯に布団や炊飯器を積み込み、まるで夜逃げのような車で派遣先の教会に向かいました。山あいの小さな群れでした。妻と幼稚園の息子は新しい土地での生活を満喫していました。地元の美味しいアイスクリーム屋さんを見つけてきたり、とても楽しそうでした。

一方、わたしはあまり楽しくない。毎週の説教準備で気持ちが追い込まれていました。会堂の机の上に註解書を広げて読みます。一日中の説教準備。しかも毎日です。それでも時間切れの感覚に囚われます。焦りました。そうして必ず日曜日がやってくる。あれもこれもできていない。精一杯準備したことを語りました。それでも不完全燃焼の感が否めません。そして週を追うごとに辛くなっていきました。

ある日、先輩の牧師に正直に相談したところ一冊の本を紹介されました。『説教学』(R.ポーレン著)です。説教の根拠を問う文にこうあ

ります。「キリストのわざおよびその人格における完全性を、聖霊のわざにおける断片性に対比せしめる。『キリスト論的関連においては、われわれは決定的に完全主義的に語らなければならない。・・・しかし聖霊論的に言えば、完全性は生命を脅かす危険ある異端なのである。』」説教は聖霊論的に考えないといけない。「断片性」という言葉が福音でした。つまり自分は説教を語ることを、まるで自分がイエス様になって語らないといけないかのように勘違いしていたのです。そうではなく、欠けがある者、断片でしかない者を神は用いてくださる。こうして、説教を準備するときにつきまとっていた焦りの気持ちから自由にされました。自分が悩んでいた問題は神学的なことだったと後から分かりました。

聖霊降臨の日、聖霊によって、多くの者が福音を語り始めました。同じように、一人ひとりの賜物を祝福して、合唱のように恵みを伝える者にしてくださる主に感謝します。授業を担当させていただく中で、いちばん学んでいるひとりはずっと自分です。神学生たち、ひとり一人が整えられ、成長が与えられていく現場の近くにいることができることに感謝しています。

夏期伝道報告



4年生

金主恵

(キム チュヘ)
西部中会
板宿教会所属



私は、徳島西部教会と新座志木教会に遣わされました。2か月間を通して、頂いた恵みは「私のすべてを用いられる神様の導き」です。私は、5歳の時に父の仕事で日本に來日し、義務教育を受け、あっという間に日本生活は23年が経ちました。ほとんど日本人と言っても過言ではありません。もちろん母国語である韓国語を話すことはできますが、恥ずかしながら、歴史や現状、教会については正直分かっておらず、自分の弱さであり、課題です。そんな私に、神様は韓国の方々との出会いを与えてくださいました。

徳島西部教会で奉仕している時に、善通寺教会の千先生から四国にいる韓国人宣教師会に誘われました。私は、韓国に所属の教会が無いにも関わらず、誘ってくださったのが嬉しく

て参加しました。祈祷会が一番印象に残っています。順番に前に出て自己紹介をし、祈祷課題を分かち合って、それぞれ声を上げて祈りました。外国での宣教は、たくさんの壁や課題が存在し、心が何度も折れそうになる時があります。しかし、インマヌエルなる神様が同じ境遇の中にいる、仲間を与えて下さり、共に祈り合い、支え合い、励ましてくださることが感謝でした。主の御心に従って、御声に従って、絶えず日本の地で宣教なさる先生方のお話は、どんな時も共におられる神様の存在と憐れみを味わわせてくれました。その祈りに自分も加えられ、また用いられていると感じました。そして、新座志木教会でも韓国が好きな姉妹や子供たちとの出会いが与えられ、日本と韓国の架け橋として福音を伝える使命があることを知りました。

ご自身の栄光のために私の全てを用いてくださる主の御名を賛美いたします。そして、共に礼拝し、祈り合い、励まし合う神の家族との出会いを絶えず与えてくださる神様に心から感謝します。これからも改革派教会の一人のメンバーとして神と教会に仕えていく者でありたいと願います。



夏期伝道派遣教会

金主恵 徳島西部教会、新座志木教会

服部宣夫 静岡教会、岡山西伝道所

安崎嗣穂 熊本伝道所、徳島西部教会

牧野 有仕 めぐみキリスト伝道所、恵泉教会

豊田真史 宿毛・清水伝道所、多治見教会

李建昌 恵泉教会、国立聖書教会



3年生

安崎 嗣穂

(あんざき つぐほ)

西部中会

山本伝道所所属



主の御名を賛美します。私は今回夏期伝道として7月に熊本伝道所、8月に徳島西部教会の両教会に遣わされました。今回の夏期伝道で最も印象に残ったのは、近隣の諸教会との交わりです。熊本では熊本チャーチネット、KCNの集会に参加させていただきました。徳島でも聖イエス会、ルーテル教会、無教会集会を訪問する機会が与えられました。これらの諸教会はいずれも、改革派とは異なる伝統に属する教会です。その点でももちろん違いを感じることもありました。しかし、同じ地域で伝道しているという点では共通の思いを持つことができました。

そして、この交わりを通して大きな恵みも与えられました。地域での伝道について真剣に考えておられる先生方と話すことにより、地域伝道への希望が与えられたのです。それぞれの地域にそれぞれの問題があります。また少子高齢化という全国共通の問題も根強く存在します。しかし神はそれらのすべてを越えておられるお方です。伝道をするのはわたしたちではなく、すべてを越えておられる神である。パウロが言うとおり、「成長させてくださったのは神」(Iコリント3:6)なのです。そのことを信

じて伝道すればよいと知ることができました。

一方で、主日ごとの奨励の奉仕においては自らの足りなさを教えられました。奨励奉仕が終わった後の日曜の夜に本当に聖書が語りたかったことが分かる、そのような経験がありました。そのような経験の中で、未だ神学の学びの途上にある身であることを痛感いたしました。しかしそれでも奨励奉仕の経験を通して、多くの学びを得ることができました。途上の身であることを忘れず、これからも一層の研鑽に励んでまいります。

夏期伝道を導いて下さった神に心から感謝いたします。又、受け容れてくださった熊本、徳島西部両教会の皆様にも感謝いたします。それぞれの地において両教会が神のために豊かに用いられますようにお祈りいたします。





3年生

豊田 真史

(とよだ まさし)
東関東中会
新浦安教会所属



私は7月は宿毛・清水伝道所で奉仕させていただきました。地方ならではのかもしれませんが、教会員と非常に近い距離で生活できるというのは恵みでした。平日でも皆様が教会を訪ねて来られ会話をし、美味しいお魚や野菜を持ってきてくれるということが日常でした。そのような中で説教を考え、生活できる恵みは大きいものでした。また皆様の祈りの中にいるということが私にとって嬉しいひとときでした。

また平日はオランダ改革派神学の巨人と言ってよいK.Schilder(スキルダー)の神学について、牧田先生から学ぶ機会を得ました。能力に乏しい私に、一ヶ月の期間付き合ってくださいました牧田先生にも心から感謝しています。

8月は岐阜県にあります多治見教会で奉仕しました。定住の牧者のいない群れでありましたので、とにかく御言葉に集中して共に励ましを受けたいと願い、8月は臨みました。とりわけルカ福音書を通して、この多治見での夏期伝道では、神様の視座、イエス・キリストがわたしたちを見ておられる“視線”を学びたい、聞きたいと思いました。

多治見教会でも主日礼拝と祈禱会の奉仕をいたしました。先ほど述べたことがどこまで出来たかは、神様にお任せします。多くの点で不十分であったと思います。けれども多治見教会の一人お一人が拙い説教の言葉をよく聞いて下さったことには夏期伝道中、何度も励ましをもらいました。説教の感想も様々に頂き、今の歩みに生かしています。

夏の期間を通して、本当に多くの恵みを神様から頂きました。また一方で自らの欠けをも痛感する時でした。とりわけ説教は、このままではいけないという思いです。「もっと深く、わかりやすく、いつでも伝道的に・・・」と様々なことを思い巡らしています。一生の課題かもしれませんが、神様の前に誠実に歩むことができるようお祈りしていただければ幸いです。



3年生

服部 宣夫

(はっとり のぶお)
中部中会
吉原富士見伝道所所属



私にとって2回目となる夏期伝道は、7月に静岡教会へ、8月は岡山西伝道所へ遣わされました。神学生を受け入れて下さったそれぞれの教会に心からの感謝を申し上げます。

さて、今年遣わされた2つの教会を通して私は、教会の歴史というものに深く触れる経験を与えられました。と言いますのは、静岡教会では遠山先生ご夫妻、青山鶴江姉、静岡盲人伝

道センターの姉妹方から、岡山西伝道所では田村先生ご夫妻と教会の兄弟姉妹方から、それぞれの教会の生い立ち、そして今に至るまでを、かなりつぶさにお教えいただいたからです。そこにおいて語られた両教会の誕生と現在までの経緯は、様々な紆余曲折を含めて、まさに神様の御計画のうちにあったことだった、神様の御手によって導かれてきたことだったと、そのようにしか言うことのできない歴史でした。同時にまた、教会の歴史とは、その教会だけの独自の個性を持っていることも深く思われました。その営みのなかで、牧師・伝道者が与えられ、多くの人々が教会に招かれ、キリストに結びあわせられ、信仰を与えられ、礼拝が守られ続けていった。牧師・伝道者も、信仰者あるいは求道者のお一人お一人の人生もま

た、神様の御計画の内にあり、神様の御手によって導かれていた。まことに人間には計り知ることのできない神様の聖定と摂理と配剤とを深く思わされた次第です。

そのような学びの中で示された私の課題は、やはり説教に関することです。神様の前にそのように個性をもった神の民に向けて、伝えるべきふさわしい神様の御言葉と御心を解き明かし得ていたかどうか。夏期伝道期間中に、常に私の右に置いていた「ウエストミンスター礼拝指針」は、その「4.御言葉の説教について」において「7.教理の適用」を説いています。この指針が目指しているところに向けて、聖書に向き合う姿勢と御言葉から学び聞くための訓練を受け続けていきたいと願っています。



2年生

牧野 有仕

(まきの ゆうじ)
東部中会
江古田教会所属



私は7月にめぐみキリスト伝道所、8月に恵泉教会へと遣わされました。7月は神学校から通い、8月は牧師館に住みながらの奉仕となりました。初めての夏期伝道で、7月と8月で環境が大きく変わったこともあり、毎日緊張の中に置かれていました。そのようななかで2か月間、私の支えとなった御言葉があります。「わ

た私たちの福音があなたがたに伝えられたのは、ただ言葉だけによらず、力と、聖霊と、強い確信とによったからです」(1テサ1:5)。この御言葉は、夏期伝道で一番初めに説教をした箇所の一節ですが、聖霊が働いてくださって福音を確かに伝えてくださるといふ強い確信を持たせられる御言葉でした。教会に仕えると

いう働きについて何も分からず、未熟な私が、依り頼むべきところは聖霊の導きしかありませんでした。これから、神学の学びや教会での色々な経験を積んでいくこととなりますが、自分の働きが用いられるのはただ聖霊の働きによるのだということをお忘れしないために、この御言葉を生涯大切にしていきたいと思えます。

また、夏期伝道を通して主から与えられた課題もあります。それは、教会員の方を思い巡らしながらより深い黙想をするようにという課題です。このことは、これまで授業や講演などで教えられてきたことではありましたが、それを実践に移すことの難しさを実感しました。それは同時に、説教と牧会（交わりを含めて）とは切り離すことができないということをお教えされたということでもありました。めぐみキリスト伝道所でも、恵泉教会でも、第一主日の礼拝後に、教会員の方の証を聞く機会が与えられ

ました。また、食事の交わりや、玄関口での交わりなども与えられました。そのような一つ一つの機会を大切にして、教会員の方お一人お一人のことを良く知り、祈りながら、説教作成にも取り組むこと、このことをいつも心に留めたいと思えます。



特別研究課程

李建昌

(りこんちゃん)

四国中会

宿毛伝道所所属



7月は恵泉教会、8月は国立聖書教会に導かれました。夏期伝道に出かける前に、良い出会いと交わりの時になることを祈りました。説教の準備で説教者が先に御恵みを受け、御言葉によって生かされていくことの大事さを体験しました。教会での働きや牧会を学び、近隣の方々への伝道もできました。夏期伝道のために祈ってくださった皆さんに感謝いたします。恵泉教会に着いてすぐ、お隣とお向かいにご挨拶に行きました。交番の警察官を始め、皆さんは笑顔で対応してくださいました。隣人と良い関係の、伝道熱心な恵泉教会の56年間の歩みが伺えました。妻は韓国語を勉強中の隣人と親しくなり、教会でお茶を飲んだりしました。

お向かいの子供と遊んであげたら、3人の子供たちは「夏休みのお楽しみ会」に来てくれました。この時に聞かせた福音が、実を結ぶようにと祈ります。周辺を散歩し、この町にキリストの平安があることを祈りました。私たち夫婦の賜物を生かして、未信者の方々とたくさん関係づくりができた恵みに感謝します。

国立聖書教会はアメリカの宣教師によって創立され、54年の歴史を持つ教会です。近くに一橋大学の学生や留学生も多く、青年たちへの伝道の可能性が伺えました。教会学校には4人の小・中学生がいて、子供説教準備の楽しみも味わいました。8月末には教会学校のピクニックが開かれ、未信者のご家族が招かれまし

た。信仰深く熱心な兄弟姉妹方と共に過ごした1ヶ月で、神様のくださる御恵みを目にすることができました。

私たち夫婦を温かく迎え入れてくださった両教会の皆さんに感謝します。夏期伝道から神学校に戻った翌日、私は緊急手術で1週間入院しました。この苦難はむしろ隠された神様の恵みの時でした。同じ病室の方々に祈りと福音を伝える伝道の働きができました。夏期伝道の期間中、私たち夫婦の弱いところにもあらわされ

た主の完全な力を賛美いたします。



その他の出来事



長年事務を担当された
ホビー泉姉、感謝会



西部中会中高生会バーベキュー（10月9日）



夏期信徒講座報告



7月7日(金)、8日(土)の二日間、神戸改革派神学校の夏期信徒講座が東京恩寵教会を会場に行われました。今年は改革派神学研修所が後援というかたちでかかわり、私も含め研修所の教師で開会礼拝や受付などの奉仕を担当させていただきました。

講師は神学校の袴田康裕教授で、「 Westminster 信仰告白を読む」という主題のもとで五回の講義が行われました。現在大会で Westminster 信仰規準の教会公認訳を作成していますが、袴田先生は憲法委員会第一分科会の委員として中心的な役割を担われています。その先生から Westminster 信仰告白についての講義を聞けるということで、二日間で65名の方々が出席されました。

講義では、 Westminster 信仰告白の読み方、その歴史的背景・神学的特徴という序論的な二つの内容、続いて、恵みと救いの確信について(第18章)、結婚と離婚について(第24章)、主の晩餐について(第29章)という三つのテーマが取り上げられました。 Westminster

ンスター信仰告白は、17世紀のイングランドという歴史的・神学的な文脈を踏まえながら読み解く必要があります。特に結婚と離婚のような倫理的なテーマは、信仰告白の文章をただ字義通りに今日の状況に適用すればよいのではなく、また逆に現代的な視点から信仰告白を批判するのではなく、その意図するところを丁寧に読み取りながら、聖書に立ち帰って考えることが大切であることを教えられました。信徒講座で取り上げられたのは信仰告白のごく一部でしたが、その全体の内容については袴田先生の執筆された『 Westminster 信仰告白講解』(上下巻、一麦出版社)で学ぶことができます。

神学校主催の集会としては、5月にも『改革派教義学』出版完成記念講演会が東京恩寵教会を会場に行われました。今後も神学校の活動が研修所との協力をはじめとしてさまざまな仕方で展開されていくことを期待するものです。

石原知弘(東京恩寵教会牧師)



秋の信徒神学講座

10月7日と同月14日に神港教会で、西神教会の弓矢健児先生を講師に迎え、「生命倫理」を主題とした信徒神学講座が開催されました。第1回目は、生命倫理の問題を神学的、聖書的に判断するためには、科学的・医学的な専門知識を正確に把握することが不可欠であることを踏まえ、生命倫理が扱う範囲を①いのちの始まりに関わる体外受精、代理母出産、クローン技術、②いのちの選別に関わる人工妊娠中絶、着床前診断、出生前診断、そして③いのちの終わりに関わる脳死と臓器移植、安楽死、尊厳死、死刑制度について、それぞれの問題の概要がわかりやすく説明されました。そして、命は神の創造の賜物であり、その命を正しく管理し育ていく使命が人間に委ねられていること、私たちの命はイエス・キリストによって罪の状態から回復させられていること、命は魂と体の統一体であって安易に魂と体の問題を分離してはいけないことなど、問題を考える際の基本的な聖書的・神学的視点が示されました。

第2回目は、臓器移植の問題が取り上げられ脳死を巡っては、脳死と判定されても長期に渡って心臓が停止しないケースがあること、現行の脳死の判定基準は絶対的なものではないこと、そもそも人の死をある瞬間に特定することができるのかという問いが主張されているなど、難しい問題をはらんでいることが示されました。この問題に関する神学的視点としては、聖

書的には脳死を認めることができる余地があり、命の連帯性や隣人愛の観点から臓器移植を積極的に捉えることができる可能性がある一方で、臓器を提供しない自由の確保、神のかたちである人間の体の商品化への警戒、臓器売買をめぐる経済的弱者からの搾取の問題などがあることから、慎重に判断すべきことが示されました。キリスト者として生命倫理を考えていく上で必要な科学的知識と神学的に大切な視点を学ぶことができました。

山口英俊(1年生)

2023年度 神戸改革派神学校「秋の信徒神学講座」

“キリスト教 生命倫理を考える”

神戸改革派神学校では、年2回「信徒神学講座」を開催しています。これは、聖書や神学を学びたいと願っている多くの信徒の方々にその機会を提供するものです。是非、響いてご参加ください。多くの方々の参加を心からお待ちしております。



受講料1日・800円

◆講師：弓矢健児
(西神教会牧師、神戸改革派神学校牧師)

◆場所：神港教会(日本キリスト教団)

◆時間：13時30分～16時

1 2023年 10月 7日(土)
「キリスト教倫理の
課題としての生命倫理」

2 2023年 10月 14日(土)
「生命倫理と脳死・
臓器移植の問題」

聖書は神が生命の創造者であることを教えています。特に人間の生命は神の御霊としての生命です。したがって、人間の生と死に関わる事柄は、キリスト教信仰において大切な倫理的課題です。しかし、20世紀後半から現代に至るまでの科学技術・医療技術の急速な進歩の結果、生命倫理の課題は飛躍的に拡大し、複雑化しています。そうした状況の中で、私たちキリスト者は、生命倫理の課題に對して、どのように考え、向き合っていくべきでしょうか。そのことを2回に渡って一緒に考えたいと思います。

〒651-1306 神戸市北区富洲が丘3-1-3 078-952-2266 www.krts.net

日韓宣教研究所公開セミナー



10月20日の金曜日に、日韓セミナーが神学校で行われました。セミナーは、日本宣教におけるより良い日韓両教会の相互協力関係の構築のために行われてきました。なんと、今年からは特別講義として神学校の授業の一環となりました。主に心から感謝いたします。

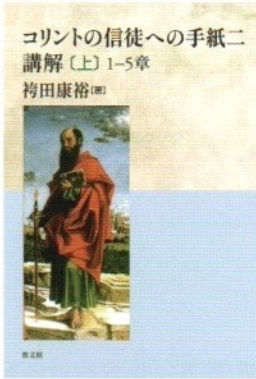
午前には、木下裕也先生を通して「歴史」の視点から日韓の伝道を考えました。特に、今回は植村正久に注目し、彼が朝鮮植民地化や朝鮮伝道についてどのような見解を抱いていたのかについて学びました。植村は、日本基督教会の大会に朝鮮伝道を提案した人物であったと伝えられています。1904年に、朝鮮伝道が開始された当時の活気を学び知りました。1910年の韓国併合について植村は神の摂理を見、肯定してしまった一方で、弱者を奴隷視する恐れについて深い戒慎を持つ人でありました。

午後は、本校卒業生でもある姜一成先生を通して「牧会の現場」の視点から伝道を見つめました。スクリーンに映る様々な写真を見ながら、先生のビジョンや現場の歩みについて具体的に知ることができました。韓国人として日本宣教をなさる先生は、様々な困難があっても交わりを導き、祝福して下さる神様に感謝し、絶えず“キリストの下に一つとなっていく”という目標を掲げながら、日々、日韓宣教協力の働きに励んでおられます。その働きに私たちも招かれていると知りました。

講義に共通していることは、福音はあらゆる壁を乗り越えることができるということです。教会はキリストを頭とする共同体であり、キリストに結ばれた誰もが兄弟姉妹で、そこに上下関係や序列はありません。私たちは様々な仕方で互いの歴史を知り、傷や弱さを知ります。しかし、そこには既にキリストによる和解と平和の道が与えられています。このことを心に留め、これからもイエスキリストの名によって共に協力し、神の国を築いていきたい!と思う講義のひと時でした。導いて下さった主に感謝します。

金主恵(4年生)





著者：袴田康裕著

『コリントの信徒への手紙二講解〔上〕1-5章』2,600円+税 (教文館、2023年)

『コリントの信徒への手紙二講解〔下〕6-13章』2,800円+税 (教文館、2023年)

『ウェストミンスター信仰告白講解』下巻4,800円+税 (一麦出版社、2023年)

袴田康裕教授が、三冊の書物を出版されました。いずれの書物のあとがきにも、先生が2024年3月をもって神学校専任教師の職務を離れることが記されており、その意味では先生の神学校専任教師としての数々のお働きを締め括る成果として出版された諸著作です。コリントの信徒への手紙二からの二冊の説教集は、著者がいのちのことば社より出版した『コリントの手紙第一に聴くⅠ～Ⅲ』に続く、貴重な説教集です。同一著者によるコリントの信徒への手紙前書後書の説教は少なく、難解でありながら珠玉の御言葉を数多く収めているコリント後書の説教集はさらに貴重です。著者ならではの、歯切れ良く精確な語りによって、力ある御言葉の輪郭が立ち上がってきます。慣れ親しむ機会の少ないコリント後書の御言葉が、この説教集によってしっかりと、恵み深く心に刻まれます。そして著者のウェストミンスター研究の集大成として、『ウェストミンスター信仰告白講解』下巻が出版されました。ウェストミンスター信仰告白の内容を解明しつつ、それを牧会的な言葉として教会で生きる信仰者一人一人の実存に届けることにより、教理と教会的実践との間の見事な橋渡しが為されています。これも、神学校における神学研究と憲法委員会第二分科会のお働きを並行して続けてこられた、今の袴田教師であるからこそ語りえた言葉ではないかと思えます。これらの著者の良き成果と実りを、ぜひ手にして味わっていただきたいと思えます。(吉岡契典)

第3学期

- 1月4日(木)・一斉開講準備
 5日(金)・第3学期開講講演会(講師:西堀元講師)
 10日(水)・入学願書締め切り
- 2月2日(金)・全校祈祷日(講師:小出昌司先生)
 13日(火)・入学試験
- 3月1日(金)・第3学期最終講義
 5日(火)・第72回卒業式
 6日(水) - 8日(金)・リーディング・ピリオド(含補講)
 12日(火) - 15日(金)・学期末試験

第1学期

- 4月4日(木)・一斉開講準備
 5日(金)・第75回入学式、第1学期開講講演会兼教授就任記念講演会
 (講師:吉岡契典教授)
- 5月11日(土)、18日(土)・春の信徒神学講座(講師:吉田隆教授)
 23日(木) - 24日(金)・神学校リトリート(講師:岸本大樹先生)
- 6月14日(金)・第1学期最終講義
 18日(火) - 21日(金)・リーディング・ピリオド(含補講)
 25日(火) - 28日(金)・学期末試験
 28日(金)・夏期伝道派遣式

夏期

- 7月1日(月) - 8月31日(土)・夏期伝道(2~4年生)
 7月5日(金) - 6日(土)・第47回夏期信徒講座(講師:柏木貴志講師)
 7月9日(火) - 9月6日(金)・ギリシャ語文法集中講義(1年生)

第2学期

- 9月9日(月)・一斉開講準備
 10日(火)・第2学期開講講演会(講師:小橋口貴人講師)
- 10月5日(土)、12日(土)・秋の信徒神学講座(講師:吉岡契典教授)
- 11月15日(金)・第26回神戸改革派・神戸ルーテル神学校合同神学シンポジウム
 29日(金)・第2学期最終講義
- 12月3日(火) - 6日(金)・リーディング・ピリオド(含補講)
 10日(火) - 13日(金)・学期末試験
 13日(金)・クリスマス礼拝・祝会

第3学期

- 2025年1月6日(月)・一斉開講準備
 7日(火)・第3学期開講講演会(講師:ステファン教授)

Q & A

“ 遺産を神学校に「寄付」したいと考えているのですが、
どうしたら良いでしょうか ”

神様からいただいた財産を最後までふさわしく用いることは素晴らしいことです。それだけに、そのお志が無駄にならないように注意が必要です。



遺言書

- 遺産は法定相続人(いない場合は特別縁故者か国庫)に帰属するのが原則ですから、神学校に寄附するためには「遺言書」を作成するのが一般的です。

「私の次の財産(口座等で特定)を宗教法人日本キリスト改革派教会(神戸改革派神学校)に遺贈する」「遺言執行者を〇〇と指定する」等と記載し、作成日も必ず書いて下さい。

- 遺言書には、①自筆証書遺言と、②公正証書遺言があります

①自筆証書遺言

自筆証書遺言は、自筆で作成し署名・押印するもので、手軽ですが形式不備による無効や紛失・改ざんのおそれもあるため、法務局の自筆証書遺言保管制度の利用をお勧めします。

②公正証書遺言

公正証書遺言は、手数料や証人2人が必要ですが、①自筆証書遺言より確実ですし、公証役場に行けない場合は出張もしてくれます。

★ **寄付額が、一定の相続人に保証される「遺留分」を超えると、後日神学校が遺留分侵害額請求を受けることがありますのでご注意ください。**



その他

- 遺言書作成以外にも、指定した財産を亡くなった時点で神学校に贈与するという契約(死因贈与契約)を神学校と結ぶ方法もあります。
- 詳しくは、公証役場や弁護士、司法書士、税理士等の専門家にお尋ねください。また、不動産や株式、蔵書等の寄付をお考えの方は事前に神学校にご相談ください。

トラブルを避けるためには、可能であれば生前に寄付していただくのが一番望ましいのですが、遺産を寄附されるのであれば(遺留分を超えない場合も含めて)予め相続人の皆様のご理解を得ていただくことが大切だと思います。

記：常石和美(大阪教会、弁護士)

神戸改革派神学校

2024 年度新入生募集案内

激しい時代の変化の中で、変わることはない神の国の福音の希望を伝えるために、あなたの人生を主に献げてください!

本科課程 (4年制)

教職養成課程です。ゆとりある充実した授業とともに実践面を強化します。

短期課程 (2年制) (4年制への編入も可能)

教会に献身する信徒のためのコース!
信徒説教者・信徒リーダーなど教会献身者の神学教育のために。

特別研究課程・ 聴講制度あり

★ 願書締め切り

2024
1/10(水)

★ 入学試験

2024
2/13(火)

まずは
お問い合わせ
ください。

